

江戸時代の将棋 – 萩藩の強豪“真甫” –

江戸時代の初め、萩藩に「真甫」という全国にその名を轟かせた将棋指しがいました。江戸時代、将棋の名人は、大橋家、大橋分家、伊藤家の三家で世襲されていましたが、真甫は、在野の強豪として、初代伊藤宗看（後の三世名人）と対局したことで有名です。寛永18（1641）年から慶安2（1649）年にかけて香車落で70番を指し、勝敗は宗看の40勝30敗でした。その時の棋譜が今も数多く残っており、その戦いぶりを知ることができます。

今回の展示では、この真甫に関する当館の史料を紹介します。

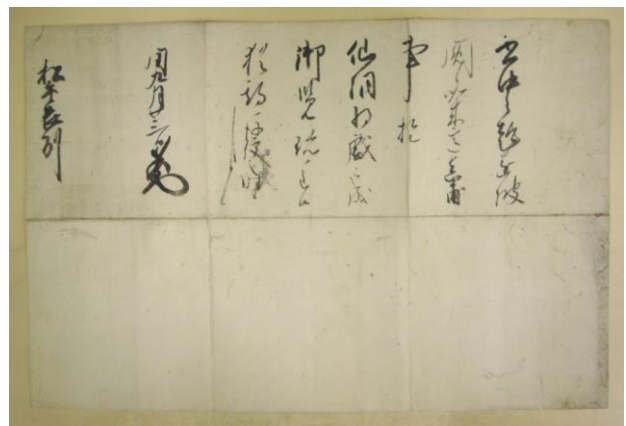
1 仙洞御所に召され将棋を指す

史料1は、寛永19（1642）年閏9月23日付で右大臣近衛尚嗣（後の関白）から萩藩主毛利秀就にあてられた書状です。

書中之趣遂披閱候、如来意真甫事、於仙洞^(将棋)将戲被成御覽珍重候、猶期後便之時候、かしく

閏九月二十三日（花押）

松平長州



史料 1 「近衛尚嗣書状」（毛利家文庫 3 他家 108）

寛永19年閏9月に仙洞御所で真甫が将棋を指し、後水尾上皇がこれを観戦したことを伝えています。真甫が仙洞御所で将棋を指したことは「毛利四代実録」にもみえ、同年同月の項に「京都へ吉村真甫ヲ召サレテ、仙洞^{後水尾帝}御所ニヲヒテ将棋叡覧有ラセラル」と記されています。彼が仙洞御所で将棋を指すに至った詳しいいきさつは不明ですが、伊藤宗看との対局が前年の寛永18年から始まっており、将棋指しとして真甫の実力が世の注目を浴びるようになったことと何らかの関係があったのかもしれませんが。近衛尚嗣の父近衛信尋（元関白）は書道、茶道、連歌など諸芸に通じた文化人で、実兄にあたる後水尾上皇を中心に形成された宮中文化の担い手の一人でした。その彼が寛永17年3月に書いた日記「関東下向記」には、中将棋の星取り表が記されており、公家の間で将棋が愛好されていたことが分かります。ちなみに3世名人伊藤宗看に「宗看」の名を授けたのもこの信尋でした。

2 「吉村真甫」

ところで、現在残されている棋譜などには、彼の名は「萩野真甫」と記され、一般にはこの名前で知られています。しかし、寛永や正保2（1645）年の分限帳には「真甫」（史料2）、慶安5年の分限帳には「吉村真甫」と記載されており、通称「真甫」で名字は「萩野」ではなく「吉村」であったことが分かります。「萩野真甫」の呼び名は「萩出身の真甫」という事なのかもしれませんが、定かではありません。禄高は寛永の分限帳によると、江戸定詰衆として8人扶持銀463匁でした。

3 中将棋で堺の法林坊温故を破り「日本一」の称号を得る

史料3は「聞書 上・中・下」（毛利家文庫 16叢書36）です。これは萩藩士国司廣孝（元禄8（1695）年～享保11（1726）年）が、諸士及び諸書より見聞した様々な事柄を順序不同に記載したものです。その中に、将棋に関して次のような記述があります。

一 将棊之日本古今之上手者、摂州境之温古と申候て有之候、御国之春甫と将棋をさし候て温古負候、依之将棊中途よりおき候て、温古数年工夫之馬あかり春甫ニ伝受す、左候て日本一之号を春甫ニ譲候、春甫が馬あかり龍馬を猛豹之座江引申候駒組なり

将棋の「日本古今の上手」と言えば摂津国堺の温古であるが、その温古と萩藩の春甫が将棋を指し、温古を負かした。温古は研究を重ねてきた馬(こま)上がり（戦術・定跡）を春甫に伝授するとともに、「日本一之号」を譲った。春甫に伝授された戦術は「龍馬」を「猛豹」の位置へ引く駒組みである、という内容です。

ここに出てくる「温古」は堺の中将棋の名人「温故」、そして「春甫」は「真甫」のことと思われます。温故は、1684年に書かれた堺の地誌「堺鑑」に中将棋の名人として紹介されています。妙国寺法林坊の僧で、あるとき温故が御水尾上皇の御所に召し出され、法橋宗知と中将棋を指した。上皇も二人の勝負をご覧になったが、結果、温故が2回とも勝ち、この時から「天下の名人」と言われるようになった、とのエピソードを伝えています。仙洞御所で将棋を指したことや上皇が観戦したことなど、真甫と共通しています。

4 中将棋とは？

「^{もうひょう}猛豹」という、現在の将棋には無い駒が使われていることから、二人が指したのは中将棋であったことが分かります。では、中将棋とは一体どのようなものだったのでしょうか。

実は、当時、私たちがよく知っている本(小)将棋とともに、中将棋と呼ばれる別の将棋も盛んに指されていました。12×12マスの一回り大きな将棋盤で、倍以上の92枚の駒を使って対戦し、チェスなどと同じく取った駒は使用できませんでした。駒の種類も「金将」「銀将」の他に「銅将」があったり、「猛豹」「酔象」「横行」「豎行」「鳳凰」「獅子」など、現在と全く異なる駒がたくさんありました。(図1参照)

真甫は伊藤宗看と対局するほど、本将棋の世界で強豪でしたが、同時に中将棋名人温故を負かすほど中将棋も得意であったと言えます。当時の将棋指しは、本将棋も中将棋もどちらも指せたようで、名人伊藤宗看も中将棋の詰め将棋集を著しています。近衛信尋の日記に記されていた星取表も中将棋であったことを考えると、真甫が仙洞御所に召されて指した将棋は中将棋であったかもしれません。

香車	猛豹	銅将	銀将	金将	酔象	王将	金将	銀将	銅将	猛豹	香車
反車		角行		言虎	言鳳	言龍			角行		反車
横行		飛車	龍馬	龍王	獅子	龍王	龍馬	飛車	横行		横行
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
			仲人					仲人			
			仲人					仲人			
歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵	歩兵
横行	豎行	飛車	龍馬	龍王	獅子	奔王	龍王	龍馬	飛車	豎行	横行
反車		角行		言虎	言鳳	言龍			角行		反車
香車	猛豹	銅将	銀将	金将	王将	酔象	金将	銀将	銅将	猛豹	香車

図1 中将棋の駒の並べ方

5 真甫が指した次の一手は？

真甫は9年間にわたり伊藤宗看と対局しました。『日本将棋大系2伊藤宗看』（筑摩書房）に収録されている棋譜の中から、正保2(1645)年8月7日の対局で、宗看の右香車落で真甫が勝利した一局を見てみましょう。

展示している盤面は、真甫の次の一手で宗看が投了する局面です。さて、真甫が指した最後の一手は？

(答：真甫の最後の一手は「▲3五歩」でした)